

# 銭形平次捕物控

金色の處女

野村胡堂

青空文庫



これは錢形平次の最初の手柄話で、この事件が平次を有名にしたのです。この頃お静はまだ平次の女房になつて居ず、ガラツ八も現はれては居りません。

## 一

「平次、折入つての頼みだ。引受けてくれるか」

「へエ——」

錢形の平次は、相手の眞意を測り兼ねて、そつと顔を上げました。二十四、五の苦み走つた好い男、藍<sup>あゐみちん</sup>微塵の狭い袷<sup>あはせ</sup>が膝小僧を押し隠して、彌造<sup>やぎょう</sup>に馴れた手をソツと前に揃へます。

「一つ間違へば、御奉行<sup>あさくらい</sup>朝倉石見守<sup>いはみのかみ</sup>様は申すに及ばず、御老中方に取つても腹切り道具だ。押付けがましいが平次、命を投げ出すつもりでやつて見てはくれまいか」

と言ふのは、南町奉行與力の筆頭笹野新三郎、奉行朝倉石見守の智恵囊ちゑぶくろと言はれた程の人物ですが、不思議に高貴な人品骨柄こつねがらです。

「頼むも頼まないも御座いませぬ。先代から御恩になつた旦那様の大事とあれば、平次の命なんざ物の數でも御座いませぬ。どうぞ御遠慮なく仰しやつて下さいまし」

敷居の中へゝり入る平次、それをさし招くやうに座布團を滑り落ちた新三郎は、

「上様うへさまには、又また雑司ヶ谷ざしやの御鷹狩たかがりを仰せ出された」

「エツ」

「先頃、雑司ヶ谷御鷹狩の節の騒ぎは、お前も聞いたであらう」

「薄々は存じて居ります」

それは平次も聴き知つて居りました。三代將軍家光公が、雑司ヶ谷鬼子母神きしもじんのあたりで御鷹を放たれた時、何處からともなく飛んで來た一本の征矢そやが、危あやふく家光公の肩先をかすめ、三つ葉葵あふひの定紋を打つた陣笠の裏金に滑つて、眼前三步のところに落ちたといふ話。

それツ——と立ちどころに手配しましたが、曲者の行方ゆくへは更にわかりません。

後で調べて見ると、鷹の羽を知はいだ籠深のぶかの眞矢ほんやで、白磨はくき二寸あまりの矢尻やじりには、松前のアイヌが使ふと言ふ『トリカブト』の毒が塗つてあつたと言ふことです。

「その曲者も召捕らぬうちに、上様には再度雑司ヶ谷の御鷹野を仰せ出された。御老中は申すに及ばず、お側の衆からもいろくかんげん諫言を申上げたが、上様日頃の御氣性で、一旦仰せ出された上は金輪際こんりんさい變替は遊ばされぬ。そこで御老中方から、朝倉石見守様へ直々のお頼みで、是が非でも御鷹野の當日までに、上様を遠矢にかけた曲者を探し出せとの言葉だ。何んとか良い工夫はあるまいか」

一代の才子笹野新三郎も、思案に餘つて罔つ引風情の平次にすが縋り付いたのです。

「よく仰しやつて下さいました。御用聞みやうり冥利、この平次が手一杯にお引受け申しませう。就ては旦那、私が聞き度いと思ふことを、皆んな隠さずに仰しやつて頂かせうか」

「それは言ふ迄もない事だ。何んなりと腑ふに落ちない事があつたら訊くが宜い」

「ではお尋ねしますが、上様を雑司ヶ谷のお鷹野に引付けるのは、何にか深い仔細しさいが御座いませう。小鳥の居るのは雑司ヶ谷ばかりぢや御座いません。目黒にも桐ヶ谷にも千住にも、この秋はこの外えもの獲物が多いといふ評判で御座います。それが何うしたわけで——」

「これく、段々聲が高くなるではないか」

「へエ——、でもこれが判らなかつた日には手の付けやうが御座いません」

「話すよ——、薄々世間でも知つて居ることだ——、雑司ヶ谷の鷹野の歸り、上うへさま様には

決して、大塚御薬園へ御立寄りになる。あの中に新築した高田御殿で、一と腕わんの御薬湯を召上がるのが、きつとお楽しみだ」

「と申すと」

「世上の噂でも聞いたであらう。御薬園預りの本草家ほんざうか、峠宗壽軒たうげそうじゆけんの娘お小夜は、府内にも並ぶ者なしといふ美人だ」

「さうで御座いますつてね、上様もまつたくお安くねえ」

「コレコレ、何を申す」

「へエ——、だが、有難う御座いました。それだけ伺へば大方筋はわかります。仔細あつて私もお小夜の顔ぐらゐは存じて居りますが、あの女は何うして——一筋縄でいける雌めすぢや御座いません——、宜しう御座います。乗るか反そるか、平次の出世試し、命にかけてもやつて見ませう」

平次の若々しい顔にはインスピレーション感興にも似たものがサツと匂つて、身分柄へだたの隔りも忘れたやうに、胸をトンと叩いて見せました。

「お鷹狩の日取りは明後日あさつてだ。ぬかりはあるまいが、そのつもりで——。拙者には拙者の工夫がある。油断をすると、手柄くわ比べにならうも知れぬぞ」

「へエ——」

二人は顔を見合せて、會心の微笑を交かはしました。與力と岡つ引では、身分は霄壤てんちの違ひですが、何にかしら此二人には一脈相通ずる名人魂があつたのです。

二

大塚御藥園、一名高田御藥園といふのは、今の音羽の護國寺の境内にあつたもので、一萬八千坪の中に有名な藥師堂、神農堂しんのうだうをはじめ、將軍臨場りんちやうの時の爲に、高田御殿といふ壯麗なる御殿まで出來て居ました。

總檜そうひのきの破風造り、青銅瓦せいとうがはらの鑄も物々しく、數百千種の藥草靈草から發する香氣は、馥郁ふくいくとして音羽十町四方に匂つたと言はれるくらゐ。幕府の御藥園の權威は大したもので、素より岡ツ引や御用聞などの近付ける場所ではありません。

與力笹野新三郎の屋敷を飛出した錢形平次、いきなり大塚へ飛んで來て、この藥臭い堀にへバリ付きましたが、場所が場所だけに、何う工面しても入り込む工夫が付かないのです。

丸半日、氣のきかない空巢狙ひのやうな事をしてゐた平次も、その日の晝頃には、到頭シビレをきらしてしまひました。

「チエツ」

舌打を一つ、袂から取出したのは、その頃通用した永樂錢が一枚です。手の平へ載せて中指の爪と親指の腹で弾くと、チン——と鳴つて、二三尺空中に飛上がりまゝ。落ちて來るところを掌で受けると、これが其儘錢占。

「歸れつて言ふのか、よし」

錢を袂に落すと、其儘塀を離れて、音羽の通りへ眞つ直ぐに踏出しました。これが錢形平次といふ綽名の出たわけの一つ。もう一つ、平次には不思議な手練があつて、むづかしい捕物に出會すと、二三間飛退つて、腹巻から鍋錢を取出し、それを曲者の面體目がけてパツと抛り付けます。薄くて、小さくて、しかも一寸重い鍋錢ですから、不用意に投げられると、泥棒や亂暴者などは、キツト面體をやられます、ひるむところを付け入つて捕る、このこつはまことに手に入つたもので、錢形の平次といふと、年は若いが悪黨仲間から鬼神の如く恐れられたものです。

その平次が見限つたのですから、御藥園の塀の中の祕密は容易のことではありません。



腹立ち紛れまぎの彌造こぎを拵へて、長い音羽の通りを、九丁目まで來ると、ハツと平次の足を止めたものがあります。目白坂の降口に、紺暖簾こんのれんを深々と掛け連ねて、近頃出來乍ら、當時江戸中に響いた『唐花屋』といふ化粧品屋、何の氣もなく表へ出した金看板を讀むと、一枚は『——おん藥園へちまの水——』次のは『——南蠻祕法なんばんひはふ、おん白粉——』そして更にもう一枚には、『——峠流たうげりうひやく祕藥色々——』とあります。

「これだツ」

平次は思はず顎を引きました。

### 三

「お靜坊居るか」

「あら親分」

その頃東西の兩國に軒を並べた水茶屋の一つを覗いて、平次は斯う聲を掛けました。

「よう、相變らず美しいネ。罪だぜ、お靜坊」

「あら親分、そんな事を言ふなら、私は嫌」

「どつこい、謝まつた。逃げちやいけねえ、今日は大眞面目に頼み事があるんだ。静ちやんは、近頃評判の音羽の唐花屋からはなやへ買物に行つたことはないか」

「いゝえ、朋輩衆ほうばいで唐花屋へ行かない人はない程だけれど、私はまだ行つたことはありません」

「さうだらうねえ、お前ほどの容貌きりやうぢや、へちまの水にも南蠻渡來の白粉にも及ぶめえ」  
「あれ、親分さん」

なるほどこれは美しい容貌きりやうです。精々十七八、血色の鮮あざやかな瓜實顔に、愛嬌あいけうがこぼるゝばかり。襟の掛つた木綿物に、赤前垂をこそしめてをりますが、商賣柄に似ず固いが評判で、枝から取り立ての果物くだもののやうな清純な感じのする娘でした。

「實は少し無理な頼みだが、半日暇をもらつて、唐花屋まで買物に行つて貰ひ度いんだが、何うだらうネ、静い坊」

「え、え、行つて上げるワ」

何んと言ふわだかまりのない返事でせう。

「そいつは有難てえ、それぢや御意の變らぬうちに——」

岡つ引と水茶屋の娘ですが、どちらも水際立つた美男美女で、二人の胸には、何時の間

にやら淡い戀心が芽ぐんできたのでせう。兎に角話の運びの早いことは大變です。

兩國から小日向まで駕籠、そこからわざと歩いて、唐花屋の入口に着いたのは彼これ西刻近い刻限でした。髪形をすっかり堅氣の娘風にしたお靜の後姿——黄八丈の袷と緋鹿の子帯が、唐花屋の暖簾をくゞつて見えなくなつた時は、大日坂の下から遠く様子を見て居た錢形の平次も、さすがに眼の前が眞つ暗になるやうな心持がしました。唐花屋がどうといふ、突き留めた疑ひがあるわけではありませんが職業的第六感とでも言ひませうか、——此儘お靜を犠牲にするのではあるまいか——と言つた豫感が、平次の頭をサツとすすめて去つたのです。

「へちまの水を下さいな」

お靜は一向そんな事を構ひません。物馴れた調子で日傘を疊み乍ら、店がまちへもう腰を下ろして居ります。

「へエ、いらつしやいまし。丁度今年採つたばかりの新しいのが御座います。これ徳どん、其處からお入れ物を持つて來てお眼にかけな」

美しい客と見ると、馴れて居る筈の店中も、何となくザワついて、二三人の番頭手代が、磁石に吸付けられる鐵片のやうに、左右から寄つて參ります。

「それからアノ、白粉おしろいも貰つて行きませう」

「へエ〜」

「それにお紅も」

大東おほたはな事を言つて、お静はソツと店中に眼を走らせました。近頃出來の店構へで何となく眞新らしい普請ふしんですが、その癖妙に陰氣で妙に手丈夫に出來ているのが、娘デリケーの織織弱トな神經を壓迫します。

「お茶を召し上がつて下さいまし」

若い丁稚でつちが、店使ひにしては贅澤過ぎる赤繪あかゑの茶碗ちやわんに、これも店使ひらしくない煎せんち茶やをくんで、そつとお静の傍にすゝめました。

「有難うよ」

身みなり扮なりに相應した堅氣の娘なら、此茶は飲まなかつたかも知れませんが、お静は水茶屋の女で、お茶を汲くむことも汲ませることも馴れて居ります。桃色珊瑚さんごを並べたやうな美しい指でそつと受けて、馴れた様子で一口、二た口。

「オヤ——？」

お茶にしては妙に甘い、そして香氣をかが可怪しいと思ひましたが、三口目には綺麗に飲ん

でしまひます。

それから口の小さい素焼すやきの徳利とくりへへちまの水を詰めさしたり、白粉と紅とを取揃へたり、お鳥目てうもくを出さうとして帯の間へ手をやつた時は、先程から我慢して居た恐ろしい眠氣ねむけが急に襲おそつて来て、性も他愛もなく美しい島田鬻かたむがガツクリ前へ傾かたむきました。

「徳どんは外を見張れ、お前は手を貸せ」

大番頭が立ち上がつて指圖をすると、馴れた様子で、バタバタと不思議な作業が始まります。

「へツ、こいつは全く掘り出し物だ」

「シツ」

二人の若い手代に抱き上げられたお静は、死んだもののやうになつて、赤い裳もすそと白い脛はよぎとが、ダラリと下にこぼれます。

音羽の通りは暫く絶えて、大日坂の下には、宵暗に光る眼、錢形の平次は全く氣が氣ぢやありません。

#### 四

此時はじめて平次は、近頃江戸中で評判になつた美しい娘が、頻ひんぱん繁ゆくへに行方不明になることに思ひ當りました——芝伊皿子いざらごしの荒物屋の娘お夏、下谷竹町の酒屋の妹おえん、麻布あざぶ斧町かうがいで御家人の娘お幸かう——、數へて見ると、此秋になつてからでも三人ほど姿を隠して居ります。それも選り抜きの美人ばかり、書置も何んにもないから、まるで神隠しに逢つたやうなものです、それが早くて三日目、遅くとも七日目には、二た目とは見られぬ慘さんざ殺つ死體となつて、川の中、林の奥、どうかすると往來の眞ん中に捨ててあるといふ始末です。

南北町奉行は、配下の與力同心に命じ、江戸中の御用聞を總動員して、この惡鬼のやうな犯人を探させましたが、何としてもわかりません。犯人がわからないばかりでなく、何の目的で選り抜きの美しい娘ばかり殺すのか、皆暮れ見當も付かないのです。その上死體は、洗ひ落してはあるが、歴々ありくと全身に金箔きんぱくを置いた跡あとがあります。

「これだく」

錢形の平次は一人うなづ領きながら、宵闇の中をすかして、唐花屋からはなやの裏口から出て行く駕籠の後を追ひました。その中にお靜が入れてあることは最早疑ふ餘地はありません。

駕籠は無提灯むちやうちんのまゝ、音羽の裏通りを眞つ直ぐに、今の護國寺、その頃の大塚御薬園の裏門へ、呑まれるやうに入つてしまひました。

「矢張りさうだ」

平次は此儘引返して、笹野新三郎に報告した上、御薬園へ手を入れさせようかと思ひましたが、御薬園の見識けんしきは大したもので、若年寄直々の指令を受けなければ、町奉行では手の付けやうがありません。そんな事で暇取つて居る内に、お静の命が絶たれては一大事。「先づお静を助けよう」

後で考へると、それは多分盲まうもく目的になりかけて居た、平次の戀心がさせた思案でせう。前後の考へもなく木蔭こかげの土塀に手が掛かると、平次の身體は軽々と塀を越えて、闇の御薬園の中へポンと飛込んでしまひました。

それから何刻經つたか、何處を何う通つたかわかりません。一萬八千坪の御薬園の中、  
 茯苓ふくりやう、苓れい、肉桂にくけい、枳殼ききく、山查子さんざし、呉茱萸ごしゆゆ、川芎せんきう、知母ちぼ、人蔘にんじん、茴香ういきやう、天門冬てんもんとう、芥子からし、イモント、フナハラ、ジキタリス——幾百千種とも數知れぬ薬草の繁る中を、八幡知らずにさ迷ひ歩いた末、僅かの灯を見付けて、眞黒な建物の中へスルリと滑り込んでしまひました。

それは多分有名な高田御殿だつたでせう。兎に角、非常に宏壯な建物で、人目を忍ぶにはまことに好都合です。廊下から部屋へ、納戸へ、梯子段へと、人と灯を避けて拾つて居るうちに、何時の間にやら平次は、天井裏の密閉した一室へ入り込んで居ります。

ハツと思つて出口を探しましたが、何んな仕掛があつたか、四方一様に檜の厚板で、戸や窓は愚かなこと、蟻の這ひ出る隙間もあらうと思へません。

「チエツ、勝手にしやあがれ」

度胸を据ゑてドツカと坐ると、不思議なことに、床板の彼方此方から、大きく小さく、下の大廣間の灯が漏れて居ります。

よく見ると、それは悉くギヤーマンを張つた穴で、この天井裏から、下の様子を覗く爲に出来たのでせう。——これは後で見ると、悉く下の大廣間の格天井に描かれた、天人の眼や、蝶々の羽の紋や、牡丹の蕊などであつたと言ふことです。

## 五

最初平次の眼に入つた光景は、廣間の中央に祀られた、何とも形容のしやうのない醜惡



怪奇を極めた魔像まざうで、その前と兩側には、眞つ黒な蠟燭ろうそくが十三本、赤い焰をあげてメラメラと燃えて居ります。

魔像の前には蜥蜴とかげの死骸、猫の脳味噌なうみそ、半殺しの蛇と言つた不氣味な供物くもつが、足の高い三方に載せて供へられ、その供物の眞ん中に据ゑた白木の大姐板おほまないたの上には、ピチピチした裸體が仰向に寝かされて、その側には磨ぎ立てた出刃庖丁が、刃を下にしてズブリと板の上に突つ立つてゐます。

「アツ」

さすがの平次も、思はず唇を噛みました。俎まないたの上の赤ん坊は、泣きも叫びもせず、好い心持さうにニコニコしてゐるのが、四方あたりの陰惨な空氣の中に、不思議な對照あがを描き出して、身の毛のよ立つやうな氣味の悪い情景シーンです。

突然、今迄聞いた事もないやうな、陰惨いんさんな合唱コーラスと共に、一隊の男女が、妖魔の行列のやうに廣間へ入つて來ました。いづれも眞黒な覆面、その間から、眼ばかり光らして、覆面越しの讀經どきやうの聲も、何んとなく陰に籠ります。

續いて燃え立つやうな眞紅しんくの布を纏まとつた四人の女が、一人の娘を伴れて現はれました。夢見るやうな足取りで、無抵抗に臺の上に押し上げられたのを見ると、こればかりは町娘

の服装をしたお靜の囚とらはれの姿だったのです。

「あツ、到頭」

あまりの事に平次は、もう少して聲を立てるところでした。人間の力で此密室が押し破れるものだったら、何處かの羽目を踏み碎くだいても飛出したであらうが、それとても出来ないことです。

又、一としきり奇怪な讀經が湧き起つて、魔像とお靜の四方あたりを、黒装束の人間の輪が、クルクルと廻り始めました。

それから暫く續いて、廣間は元の靜寂に還ると、不意に、人間の輪はサツと散ります。見ると、臺の上に立つたお靜は何時の間にやら、黒装束くろしやうぞくの人間達の手で、十七乙女の若々しい肌へ、ベタベタと金箔きんぱくを置かれてあるところだったのです。お靜は魂の抜けた人形のやうに、少し仰向き加減に突つ立つた儘、なすが儘に任せて身動きもしません。

やがて乙女の上半身に金箔を置き終ると、黒衣長身の長老とも見える男は、黒頭巾の覆面を取つてお靜の前に近づきました。

「あツ」

平次はもう一度聲を立てるところでした。その男といふのは、地獄變相圖から抜け出し

た、悪鬼のやうに恐ろしく映つたでせう。

「――」

續いて覆面を除つたのは、この藥園の預主、峠宗壽軒です。半白の中老人で、立居振舞に何となく物々しいところがあります。

二人は前後して進んで、金箔を置いた乙女の肩へ唇を觸れました。續く黒装束の五、六人も、悉く覆面を外して、同じやうに乙女の身體へ唇の雨を降らせませう。

この冒流的な行法が、どんなに平次を怒らせた事でせう。お静の清らかさを救ふ爲に、どんな事をしても――とあせりましたが、此密室はどんな設計で出來たものか、二刻あまり探し抜いても、どうしても入つた場所がわかりません。

その内に、下の廣間が又賑かになりました。と見ると、焰のやうな赤い布を纏つた、半裸體の四人の美女は、人面獸身の魔像と、金箔を置いたお静を中心にして、あらゆる狂態を盡して亂舞を始めたのです。

魔像の前の大香爐には、幾度も異香が投げ込まれました。天井裏でそれを嗅ぐと、平次の心持も、うつら／＼夢見るやうになります。

幾度か醒めては、廣間の様子を覗き、幾度か氣を喪つては何刻となく深い眠に陥ちまし

た。——これではならぬと——満身の力を兩の拳こぶしにこめ、兩眼を見開いて氣を勵ましました。泥酔した人のやうに崩折くづれて、その努力も永くは續きません。

金色の處女をとしめ——お靜の上に加へられる、あらゆる辱はづかしめと、怪奇至極の大儀式が、斷片的に平次の眼と耳に焼き付けられながら、そのまゝ遠い／＼過去の出來事のやうに、他愛もなく消えて行きます。

## 六

明くれば十月九日、三代將軍徳川家光は近臣十二名を徒へ、微行しのびの姿で雜司ヶ谷へ鷹狩に出かけました。十二人の内四人は將軍と同じ装よそほひをした近習連、四人は鷹たかしやう匠もつと、あとの四人は警衛の士で、微行とは言ひ乍ら、此時代にしては恐ろしく手輕です。尤もこれは家光自身の命令で、目障りになるやうな士卒は、間近に置かれなかつたまでのこと、音羽から小日向、大塚へかけては、何千とも知れぬ警護の士で、蟻の這ひ出る隙間もなく固めて居ります。

此日はことの外不獵ふれふだつたせゐるか、家光は恐ろしく不機嫌で、近習達とろく／＼口も利

きません。鷹狩が済むと、待ち構へて居たやうに音羽へ下つて、大塚御薬園の高田御殿へお入りになります。

御薬園の門前に迎へたのは、峠宗壽軒、五十がらみの總髪で、元々本草家で武士ではありませんが、役目ですから、麻袴を着けて將軍を高田御殿へ案内します。

奥の間、贅を盡した調度の中に納まると、近習達も遠慮をして、將軍を存分にくつろがせなければなりません。高麗縁の青疊の中、脇息に凭れて、眼をやると、鳥の子に百草の譜を書いた唐紙、唐木に百蟲の譜を透し彫にした欄間、玉を刻んだ引手や釘隠しまで、此部屋には何となく、さり氣ないうちに漂ふ一抹の怪奇さがあります。

此時、女の童に襖を引かせて、茶碗を目八分に捧げて入つて來たのは、峠宗壽軒の娘お小夜です。曙色に松竹梅を總縫した小袖、町風に髪を結び上げた風情は、長局風俗に飽々した家光の眼には、どんなに美しいものに映つたでせう。年の頃は二十二三、少しふけて居りますが、その代り町家にも武家にもない、滴るやうな美しさがありません。恐るゝ色もなく、家光の前に進んで、近々と茶碗を進め、二三歩返つて、

「お薬湯を召し上がりませ」

わだかまりもなく言つて、俯向加減に莞爾します。こんな無禮な仕打は、日頃の家

光には見ようつたつて見られません。大名が廊くるわがよ通ひに夢中になつたやうに、將軍家光が雜司ヶ谷の鷹狩に夢中になつたのも無理のないことです。

「――」

家光は黙つて茶碗を取り上げました。本草家峠宗壽軒せんの煎じた藥湯、別に何の藥と言ふでもありませんが、神氣さはやを爽かにして、邪氣じやきを拂ふ程度のもの、唇のところへ持つて行くと、高價な藥の匂ひがプーンとします。

## 七

天井裏に閉ぢ籠められた錢形の平次、幾刻――いや幾日眠らされたかわかりません。フト眼を覺すと、四方あたりはすっかり明るくなつて、天井裏乍ら埃ほこりの一つくも讀めさうです。怪奇な舞踊を思ひ出して、嘔氣はきけを催すやうな不愉快な心持になりましたが、お靜あんびの安否が心もとないので、もう一度ギヤーマンの穴から覗くと、廣間は廣々と取片付けられて、白日の光が一杯にさし込み、忌はしい物など影も形もありません。

思ひ直して出口を深すと、今度はわけもなく見付かりました。壁は同じやうな檜の厚板

で張り詰めてありますから、一箇所だけ手摺れがして、出入口といふことは直ぐわかります。暫く押ししたり叩いたりして見ると、どうした弾みか、いきなりスーツと開きます。多分扉の下の踏み板に仕掛があつたのでせう。

一足漲るやうな白日の光りの中へ飛出しましたが、困つたことに、庭にも廊下にも、廣間にも玄關にも、夥しい人間がたかつて居て、天井裏から飛出したまゝでは、大手を振つて出て行くわけに行きません。

「あツ、いけねえ。今日は上様お鷹狩の日だ」

霞んだやうな平次の頭にも、これだけの記憶が蘇つて來ました。今日までに毒矢の曲者を捉へる筈だつたのが、天井裏に閉ぢ籠められてすつかり豫定が狂つてしまつたのです。

「こいつはしまつた」

平次は天井裏で地團駄を踏むばかりです。

それから又何刻か経ちました。御殿の中の空氣は遽に緊張して、

「上様のお着き」

といふ囁きが、隅々までも行互ります。

上様お着きと言ふのは、お鷹野は無事だつたといふ證據にもなりますから、天井裏の平

次もそれを聞いてホツとします。

「間違ひがあれば、この御殿内だ。よし、それならば、まだ望みがある」

暫く泥棒猫のやうに、天井から天井へ、梁はりから梁へと渡つて歩いた平次、何時の間にか、羽目からスルリと抜け出して、離れの廂ひさしの下に這ひ込んでしまひました。首を少し曲げると、一枚開け放つた障子の中に、上段の高麗縁かうらいべりが見えて、豊かに坐つた黒羽二重の膝も見えます。

「上様だツ」

平次はヒヨイと首を引きました。と同時に小夜が捧げた薬湯の茶碗が見えます。

やがて家光は薬湯を手に取り上げた様子、それと同時に平次の眼には、もう一つ動くものが映ります。それは障子の外に、物の隈くまのやうに踞まつた總髪の中老人、霰あられ小紋の袴こまみしもを着て、折目正しく両手について居りますが、前夜怪奇な行法を修ずした、この薬園の預主、峠宗壽軒たうげそうじゆけんに違ひありません。

家光が茶碗を取り上げて、唇まで持つて行くと、宗壽軒の唇が歪ゆがんで、障子を射通すやうな瞳が、キラリと光ります。

「あツ、毒湯どくたうだツ」



捕物の名人、錢形平次には、外の人にならない第六感が働きます。前後の事情から考へ合せで見ると、家光の手に持つて居る茶碗の中に、正面まともな藥湯が入つて居るわけはありません。笹野の旦那が呉々も頼んだのは、これだツ。

平次はいきなり廂むさしから飛出さうとしましたが、高が岡つ引、將軍様の前へ飛出せるわけもなく、大きい聲を出さうにも、其邊の物々しいたゞずまひを見ると、うつかり騒ぎを大きくして、相手に棄鉢すてばちに出られると、反つて恐ろしい事になりさうです。それに毒湯と思ふのは、平次の單なる疑ひで、實は本當の藥湯を勸すすめて居るのかもわからないのです。

ハツと氣が付いて腹巻を探ると、折悪しく鍋なべ錢せんはありませんが、小粒が二つ三つ。と、それに柄にもなく小判が一枚あります。其頃の小判は大變な値打で、岡つ引などに取つては一と身代ですが、一昨日をと、ひ笹野新三郎から用意のために手渡された金、將軍様の命かゝはに關らうと言ふ場合ですから、物もの惜をしみなどをして居る時ではありません。

いきなり小判を右手の拇おやゆび指ゆびと食ひとさし指ゆびとの間に立てて、小口を唾つばで濡ぬらすと、錢形の平次得意の投げ錢、山吹色の小判は風をきつて、五、六間先の家光の手にある茶碗いしぞの底こに發矢はつしと當ります。藥湯は飛散つて、結構な座布團も疊も滅茶々々。

「――」

家光は動ずる風もなく、面おもてをあげて小判の飛んで來た方を吃きつと見やります。

「あツ」

驚いたのはお小夜、起ち上がると、いそくと近寄つて、藥湯に濡れた家光の膝へ、身體と一緒に、總縫ひ松竹梅の小袖を、サツと掛けました。

## 八

「これ、何をする——」

あわてて居住ひを直す家光の膝を追ふやうに、お小夜は袖の上へ顔を伏せました。

次の瞬間には、

「贗にせもの者ツ」

と弾はじき上げられたやうに起ち上がります。

「漸やうやく氣が付いたか」

「エツ、口惜くやしい、お前は誰だえ」

飛退く女の帶際を猿臂ゑんびを延ばしてむんずと搦にせんだ偽家光。

「與力笹野新三郎、上様の御座を拜借して、其方親娘おやこの企たくらみを見破りに參つたのだ。神妙にしろ」

と、高い聲ではありませんが、ツイ調子に乗つて名乗りを上げてしまひました。

これが非常に悪かつた——と言ふのは、障子の外で、深怨しんゑんの眼を光らせて居た峠宗壽軒、娘の聲にハツと驚いたところへ、續いて笹野新三郎の名乗りです。思はず起ち上がるのへ冠かぶせて障子の内から、

「父上ツ、露見ろけん——早く、早く、地雷火ぢらいくわツ」

と娘のお小夜が悲痛な聲を絞ります。

「おツ、娘、さらばだぞツ」

ヒラリと縁側から飛降りると、廂ひさしの上から錢形平次が、パツと飛付くのと一緒でした。

「野郎ツ、何處へ失せやがる」

素より捕物の名人、寸毫すんがうの隙すきもありませんが、困つたことに宗壽は思ひの外の剛力で、それに平次は、まる二日物を食はない上、廂から飛降りる機はずみに足を挫くじいて、進退駈引自由になりません。

「エツ、面倒」

二人はそれでも負けず劣らず捻ぢ合ひました。あまりに咄嗟の出來事で、遠ざけられた近習達が、駆け付ける暇もなかつたのです。

そのうちにお小夜の背がバラリと解けました。錦の厚板のひと抱ほどあるのが、笹野新三郎の手に残ると、お小夜は脱兎の如く身を抜けて、

「父上、地雷火は私がツ」

「お、娘頼むぞツ、あの犠牲も逃すなツ」

親娘は最後の言葉を交すと、總縫ひ松竹梅の小袖は、大鳥のやうにサツと奥へ飛込みます。

犠牲と聞いて平次は驚きました。捨鉢になつた宗壽軒父子が、地雷火で高田御殿を吹き飛ばすとすると、あの可哀さうなお静の命は一たまりもありません。金箔を置いて一度は祭壇に載せた處女の身體は、いづれあの廣間の何處かに隠してあるに相違ないでせう。

「笹野の旦那、此奴を頼みます」

「お、心得た」

その内に遠慮して遠退いて居た近習達も、騒ぎを聽いて駆け付ける様子。平次は猛然として突つかゝつて來る宗壽軒を、一つかはして芝生の上に叩きのめすと、身を退いてサツ

とお小夜の後を追ひました。挫いた足首は、焼金を當てるやうに痛みますが、今はそんな事を言つて居る場合ではありません。

勝手を知つた大廣間の中へ入ると、プーンと鼻を衝く煙硝の匂ひ、地雷火の口火は早くも點けられたのでせう。

今更事の危急な勢ひに、平次はゾツと總毛立ちましたが、お静を匿した場所はまるで見當が付きません。

「お前は錢形平次、もう駄目だよ。一緒に死ぬばかりだ」

からく  
 呵々と氣違ひ染みた笑ひを突走らせるのは、黒髪も衣紋も滅茶々に亂した妖婦お小夜、金泥きんでいに荒海を描いた大衝立おほついたての前に立ちはだかつて、艶やかに邪よこしまな眼を輝かせます。

「やい、女、あの娘を何うした」

「知らない」

「いや、知つてゐる筈だ、言へッ」

「言はない、——どうしても言はない。私達をこんな破目に陥し込んだのはお前だらう。

——その代りお前の名前を譚言うはごとに言つて居るあの娘は、この御殿と一緒に木葉微塵こつばみぢんに碎くだ

け散るよ。好い氣味だ、——あれはお前の情人だらう。知らなくつてき、——お、もう口火は燃えきつた。ホ、ホ、ホ、ホ」

「いや、俺はお静を助けて見せる」

「馬鹿なツ」

荒海の衝立、怒り狂ふ紺青の波頭を背にして、小袖の前を掻き亂したまゝ、必死の笑ひに笑ひ狂ふ美女の物凄さ。物慣れた平次も、思はずタジタジと退りましたが、次第に激しくなる煙硝の匂ひに、もう一度氣を取り直して、毒蛇の眼の如きお小夜の瞳を、精魂こめて凝つと見詰めました。

「解るまい、もう最後だ。それツ」

「いや、解つた」

何を考へたか平次は、猛然としてお小夜の身體に飛び付きました。細腕を取つて引退け、荒海の衝立をサツと前へ引倒すと、その背後にあるのは『御藥草』と書いた御用の唐櫃、力任せに蓋をハネると、中から燦として金色無垢の處女の姿が現はれます。

全身に金箔を置かれたお静は、半死半生の儘此中に入れられて、捨てるか殺されるかする最後の運命を待つて居たのでした。

「あツ、それを助けては」

後ろから縋り付くお小夜を蹴返して、金色の處女を小脇に痛む足を引摺つて外へ飛出す

平次、——それと同時に、

轟ぐわうぜん然ぜん——天地も崩るゝやうな物音。

天に冲する火焰の中に、高田御殿は微塵に崩れ落ちてしまひました。

## 九

これは後でわかつた事ですが、峠宗壽軒の前身は、駿河大納言忠長の臣で、本草の心得があるのを幸ひ、京都に行つてその道の蘊奥を窮め、身分を隠して大塚御薬園を預るまでに出世したのです。

主君忠長自殺の後は、何んとかして、家光に怨を報じようと、高田御殿の中に祭壇を設けて、中世に流行つた悪魔を祭神とする呪法を行つたのでした。その祭に夥しい犠牲を要するところから、腹心の者に命じて、音羽九丁目に唐花屋といふ小間物屋を出させ、江戸中の美女を釣り寄せては、その内でも優れた美人を誘拐かして犠牲にし、連夜

ひそかに悪魔の呪法を修して將軍家光を調伏する計畫だったのです。

それも罫が明かないと見て、近頃は毒矢を飛ばしたり、娘お小夜の美色を餌に、毒湯をすゝめて一擧に怨を報じようとしましたが、奉行の朝倉石見守が老中に進言して、將軍家光に面差の似た與力笹野新三郎を替玉に使ひ、見事にその裏を搔いて取つて押へたのでした。

峠宗壽軒は詮議中に自殺してしまひましたが、娘のお小夜はそれつきり何處へ行つたかわかりません。

大塚御薬園は、その後間もなく取潰しになり、天和元年護國寺建立の敷地として召上げられた事は人の知るところです。

錢形の平次はこれだけの仕事をして、將軍の命を狙ふ怨敵を平げましたが、笹野新三郎に約束したお鷹野以前に曲者を擧げることが出来なかつたのと、事件の性質が性質なので、表向はその手柄に酬いられませんでした。併し、家光の胸に錢形平次の名が印象深く記憶された事と、金色の處女——お靜の愛を確り掴んだことだけで、若い平次は満足しきつて居りました。







# 青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第二十二卷 美少年國」同光社

1954（昭和29）年3月25日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1931（昭和6）年4月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 錢形平次捕物控

## 金色の處女

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>